文型「～てはじめて～」に関する一考察
ー「～てからはじめて～」「～てみてはじめて～」との比較を通じてー

梁雲鵬（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

文型「てはじめて」の副詞・複合辞用法、またこれらの使い分けは日本語学習者にとって難しい点である。一方で、その類似表現と見なす「てみて/からはじめて」に挿入する「みて」「から」成分の機能はまだ解明されていない。

したがって、本発表では日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を用いて研究を行い、日本語教育学の視点から、新たな分類法の提示を試みた。さらに、前述 3 つの類似表現の使用実態も調査し、付加成分の機能を明らかにした。

結果として、「てはじめて」を副詞意味①②・期間設定・条件設定 4 つの意味に再分類した。「てみてはじめて」の前方共起が意志的動作の場合は試行の意味を付加する；非意志的動作の場合、認識や発見のきっかけを強調する効果になる。「てからはじめて」期間設定の場合は設定される期間の起点を強調する；期間設定以外の場合、事態が生起する前後順序を明示する効果になることがわかった。

焦点の後方偏移に用いられる助詞「ね」について

陳冰冰（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

本研究では、助詞「ね」の研究における最も基本的な機能を探求するために、日本語母語場面と第二言語 としての日本語場面の自然会話をデータに、「ね」が付く談話文を取り上げ、終助詞「ね」の「発話確認」機能から出発し、新たな視点として助詞「ね」の「ファティック化」・「提題化」という役割に注目し、談話上における機能として、機能分類を行った。結果として、助詞「ね」の付加により、発話の焦点が 「ね」の後方文脈に偏移することがわかった。談話上における機能として、助詞「ね」が「ファティック性」と「提題性」を持っている。その中、「ファティック性」が「相槌表現」・「挨拶表現」、「提題性」が「通常文末文」・「後続行為期待文」「同意要求文」などに分類された。本研究の機能分類により、従来纏まらなかった助詞「ね」の最も基本的な機能をより明確にするとともに、日本語学習者に対する助詞「ね」の習得に新しい示唆を与えることができた。

指示詞コソアの後方照応

近藤芙由（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

日本語の指示詞の用法には、指示対象が指示表現より後に出現する「後方照応」という用法がある。従来、後方照応ではコ系とソ系が使用され、ア系は用いられないとされてきた。そこで本研究では、ア系が後方照応として使用されている実例を提示し、コソア全てが後方照応として使用可能であることを主張したうえで、それぞれの構文的・意味的特徴などを検討した。また後方照応の中には、前方照応の形式でも言い表せるものが多いことから、後方照応は前方照応を倒置させた形式として見なすことができると判断し、倒置の観点を取り入れて考察を行った。

その結果、話し手／書き手の意図や、それによって生まれる聞き手／読み手に与える認知的効果などから、「倒置によって有標性が付与された情報に聞き手の注意を向けさせる」という「修辞的倒置」と、「文や発話が後続することを予示・予告し、当該の文や発話のリーダビリティを向上させる」という「実用的倒置」に分類できることが明らかになった。

自称詞に見る中日両言語の異同について
ー「我」「吾」「私」をめぐってー

張心怡（浙江工商大学東方語言与哲学学院）

本研究は言語接触の関連理論に基づきながら、漢字「私」の日本語における自称化を研究問題として展開する。その研究過程としては、まず漢字辞典や古典中国語文献を全面的に調査し、その中で「謙遜的に自己をさす」を表す意味に絞り、自称化の発足点ではないかと推測した。そして、『大正新修大蔵経』などの漢訳仏教文献を調査することによって、「私云」「私謂」「私抄」いわば「私＋V」型の用例が多く存在していると分かってきた。それによって、自称詞としての「私」は仏教文献に由来するとも判明される。更に、仏教文献の流伝によって「私云」「私謂」「私略」などの表現が日本に流入する一方、元々の単なる「私＋V」型を継承した上で、「私＋V＋云」などのような新たな表現型も創造する。それと同時に、「私」も指示代名詞化され、更に自称化されるようになった。

歴史的回想を表す「～ていった」について

井上直美（埼玉大学人文社会科学研究科博士後期課程）

歴史的回想を表す「～ていった」は、日本語教材類にほとんど解説が見られない表現である。本発表は、上級よりもさらに上を目指す日本語学習者を支援する立場から、この表現を「～ていく」の下位用法（級外下位ポイント）と位置づけ、学習者の産出状況（JCK 作文コーパス）と、日本語母語話者の使用実態（JCK 作文コーパス、BCCWJ、書籍 6 冊）を調査・分析した。その結果から、①日本語学習者は、Ｎ１レベル相当でも「～ていった」を十分に産出できない可能性が高いこと、②日本語母語話者は、複数の事象の一連の過程をテキスト内で大局的にまとめて述べる際にも「～ていった」を用いること、③「歴史」ジャンルでの使用頻度が高いことを指摘した。以上を踏まえ、本発表は、歴史系を専門とする日本語学習者には、初中級での「～ていく」とは別に、独立した指導項目としてこの「～ていった」を取り上げ、産出できるようにする必要があることを主張した。